

白根地区への
祭り囃子の伝承について

添田悟郎

目次

1. はじめに	10. 楽器の紹介
2. 経緯	10-1. 締太鼓
3. 白根地区の神社	10-2. 大太鼓
4. 神明社(神明宮)の祭典	10-3. 笛
5. 比々多神社の氏子離脱について	10-4. 鉦
6. 祭り囃子	10-5. バチ
6-1. 比々多地区の祭り囃子	11. 所感
6-2. 白根の祭り囃子	
6-3. 笠窪の祭り囃子	
7. 白根地区への伝承	添付資料
7-1. 祭り囃子の選択	○太鼓譜面
7-2. 曲目	・やたい
7-3. 笛について	・みやしょうでん
7-4. 指導方法	・にんば
8. 指導結果	○笛譜面
9. 今後の課題	・やたい
9-1. レベルの違い	・みやしょうでん
9-2. 太鼓の維持管理	○CD-R
9-3. 他地区との交流	※PDF データ収録
9-4. さらなる発展	

1. はじめに

この文書は私が白根地区へ祭り囃子を伝承したことの経緯を、記録として残すために作成したものである。一般的に神社祭礼で囃されている祭り囃子の伝承は記録が残されていることが少なく、古老の話などで言い伝えられていることが多いのが現状である。したがって、囃子の伝承とその経路については信憑性に欠ける情報が多く、正確にその起源を遡ることは難しい。また、祭り囃子は音楽であるため、音の記録が残されていない状況がさらに祭り囃子の歴史の調査を難しくさせるのである。いくつかの地区では記録として譜面を残している所もあるが、伝承の過程で囃子の曲調が変化したり、囃子自体が廃れてしまうことは珍しくなく、譜面だけを解析しても、実際に伝承された囃子がどのような曲だったかを再現することが困難な場合もある。

上述のことを踏まえ、白根地区の祭り囃子がどのように始まったかを、伝承者の私が記録として残すことは、祭り囃子の歴史を調べる上で非常に重要なことであると考えた。また、これから白根地区で祭り囃子を伝えていく方々にとっても、今後の方向性を決めて行く上で、この文書を参考にいただければ幸いである。

2. 経緯

私は昭和 50 年(1975 年)6 月 9 日に伊勢原市笠窪で生まれ、小学生の頃から祭り囃子に携わって来たが、仕事の関係で平成 19 年(2007 年)に白根へ移り住むことになった。それまで白根地区に祭り囃子はなかったが、平成 20 年(2008 年)に太鼓一カラが寄付され、当時の白根自治会長の依頼を受けて囃子を教えることになった。また、軽トラックに載せる屋台(山車)も同年に新調している。指導の件については当時の笠窪太鼓連会長にも了承を頂いており、私が地元の笠窪へ引っ越す平成 26 年(2014 年)までの 6 年間行った。

3. 白根地区の神社

白根は明治初年まで三ノ宮・栗原・神戸と共に比々多神社の氏子であり、天保 12 年(1841 年)完成の『新編相模国風土記稿』によると村持の神社として「神明宮」・「辻宮明神」・「箱根権現」・「八王子権現」・「稲荷社(2 社)」・「立石権現」があった。明治 5 年(1872 年)に比々多神社の祭祀から離脱し、翌明治 6 年(1873 年)に村内にあった祠を改修して現在の「神明社」を鎮守とした。祭神は「天照大神」で、末社は「金比羅様(木造)」・「天王社(石造)」・「水神(石造)」・「地神(石造)」・「山神(石造)」・「辻の宮明神(石造)」・「稲荷社(石造)」・「箱根権現(石造)」・「八王子権現(石造)」・「神武天皇(石造)」である。

神明社(神明宮)は以前から古墳の上に建てられていると言われていたが、昭和 62 年(1987 年)11 月に本殿改築のため古い建物を取り払って整地を行った際に、大きな石がいくつか出現したため言い伝えの通り古墳があったのではないかと想像される。

4. 神明社(神明宮)の祭典

例祭日は大正2年(1913年)の『比々多村史』によると9月20日であったが、近年は4月2日となり、現在は4月第1土曜日となっている。近年では夏に行われる納涼祭の方が盛大に行われているが、かつて、神明社の祭典は氏子が集まる一年中で最も盛大な行事であった。この時に限り本殿奥の院の扉を開いて祭りを報告し、国家安泰、氏子繁栄を祈願した。神様をお慰めするために神楽を奉納し、家庭内では御馳走を作り親戚が大勢集まって談合した。しかし、時代の経緯と共に氏子達の慰安に変わり、さらに食生活や娯楽の多様化に伴い祭典は神事のみで余興が行われなくなっていった。

祭典の余興については明治23年(1890年)10月9日に御遷宮にて歌舞伎芝居奉納という記録がある。毎年余興は区域内の氏子から祭典費(昭和5、6年頃は1戸1円より5円位まで)を徴収し、その内余興費(神楽：15円位、芝居：30円位)として青年会に渡した。

現在では子供神輿(樽神輿)や祭り囃子を取り入れ、4月の例大祭では白根地区を巡行するようになり、神社境内の神楽殿でも余興が行われるようになってきている。また、平成26年(2014年)からは簡略的ではあるが宵宮も行われるようになった。

5. 比々多神社の氏子離脱について

明治の初頭まで三ノ宮比々多神社の神輿の出御や還御作法は白根の氏子が勤めており、比々多神社覆殿周囲の玉垣には白根氏子22名の寄進表柱が残されている。白根村が比々多神社の氏子村から離脱した経緯については、確たる資料がないためその原因は不明であるが、古老より聞き取りした二つの伝承がある。その一つは、明治5年(1872年)5月5日の国府祭(こうのまち)の前夜に氏子村の若者連が「三之宮」と書かれてある高張提灯を先頭にして社頭に参集する慣しであったところ、白根村の若者組のみが「白根村若者連中」と書いた提灯を持って来たので、口論の末喧嘩になったという。

その二つは、比々多神社の神輿を収納してある御蔵の鍵を従来白根村が保管していたが、三ノ宮村がその鍵を預かりたいと引渡しを要求し、喧嘩して物別れになったという。その頃、三ノ宮と神戸の境には三角のまきが喧嘩の準備としていけてあったという。

6. 祭り囃子

6-1. 比々多地区の祭り囃子

比々多地区の祭り囃子がどのようなルートで伝わり、いつ頃から始まったかについては記録が残されておらず、全く分からないのが現状である。私なりの見解はあるが、推測の域を出ることはないので、ここで記述することは避けさせて頂きたい。現在、比々多地区の太鼓の団体は白根太鼓連を除いて7団体あり、いずれの祭り囃子も若干の違いはあるものの、その系統は同じものである可能性が極めて高い。

6-2.白根の祭り囃子

白根には古い大太鼓が1つ残されており、いつ頃のものかは革を切って胴の中身を確認しないと分からない状態で、祭り囃子に使われていたかどうかも分かっていない。歴史的に見れば、かつて白根は三ノ宮と同じく比々多神社の氏子であり、白根の祭り囃子の立ち上げに関しては、三ノ宮から教わるべきだという考えもあると思われるが、果たして明治初年に今のよう祭り囃子が既に伝わっていたかどうかは分からず、そもそも白根自体に祭り囃子が存在していたかどうかも分かっていない。以上のことから、白根の祭り囃子の歴史が分かっていない状況では、現状の白根を取り巻く環境を考慮して、白根自治会自身が祭り囃子の導入方法を検討することが必要であると思われる。

6-3.笠窪の祭り囃子

笠窪の祭り囃子の起源は分かっていないが、戦争の影響で一時期中断しており、昭和55年(1980年)11月に「笠窪太鼓連」を結成し、翌昭和56年(1981年)の例大祭で祭り囃子を復活させた。当時は戦前に叩いていた経験者や子易上からの移住者、そして近隣の善波などから太鼓を指導してもらった。戦前の経験者には私の祖父も含まれており、笠窪太鼓連の立ち上げと同時に私自身も太鼓を始めているので、復活後から現在までの笠窪の祭り囃子の歴史についてはある程度把握しているつもりである。笠窪には麻縄で組まれた締太鼓とそれを締めるためのカケヤが現在でも残されているので、戦前に太鼓を叩いていたことは間違いないと思われる。

笠窪は江戸時代末期から明治初年頃の間には串橋から分村したと考えられるが、その頃の祭り囃子の歴史については遑れない状況である。また、坪ノ内は平成に入ってから太鼓連を立ち上げ、善波と笠窪から囃子が伝承されている。善波の三嶋神社の前一帯は鎌倉時代の伝説の武将「善波太郎重氏」の居館があったところといわれ、善波の歴史は古いと思われるが、祭り囃子の歴史については分かっていない。

7. 白根地区への伝承

7-1.祭り囃子の選択

白根地区に祭り囃子を教えるにあたって一番重要なことは、どの地区の囃子そして曲を選択するかである。私はこれまで比々多の全ての地区で太鼓を叩いた経験があり、伊勢原市内だけではなく、平塚市・秦野市・二宮町・厚木市などへ出向いて、様々な囃子を学んできた。これらの地域で比々多地区と同系統の祭り囃子を比べたときに、笠窪の祭り囃子はバチ数やテンポなどがほぼ中間の位置にあり、曲の構成自体も他の地区の祭り囃子と比べて逸脱するものではないため、私の地元である笠窪の囃子を教えることにした。

因みに、この文書では学術的な分類で『祭り囃子』という呼称を使っているが、もともと笛が無い囃子のためか、同系統の囃子では『太鼓』という呼称の方が使われている。

7-2. 曲目

ここでは白根地区に伝承した曲の解説をする。太鼓は笠窪の叩き方であるが、笛は二宮の中里から私が習ってきた吹き方である。白根に配布した譜面は最後に添付するが、太鼓の譜面は白根用に作成したものである。なお、音のデータについては同系統の囃子が消滅する可能性は極めて低いと考えられ、ここで記録として残す必要がないと判断した。

① やたい

この曲は同系統の祭り囃子において殆どの地区で伝承されており、主に、神輿が宮立ちして町内を渡御するときに囃される曲である。バチ数やテンポの違いはあるものの、ある程度、祭り囃子に携わっていれば、他の地区に行っても一緒に太鼓を叩くことができる。曲としては長い方の部類に入るが、単調なリズムの組み合わせである為に覚えやすく、祭り囃子の伝承時において比較的正確に伝わってきた確率が高いことが伺える。

曲名については『やたい』と平仮名で表記したが、漢字では主に『屋台』と表記される。しかしながら、伊勢原市内では『やたい』と呼んでいるところは殆どなく、『祭りばやし』・『ばっかっぱやし』・『相模ばやし』、あるいは単に『はやし』などが挙げられ、さらには名前自体がない地域も存在する。このことから、この曲は神社祭礼で演奏される一般的な曲であることを象徴しており、特に伝承された曲数が少ない地域では、曲の識別をする必要がないためか、伝承時または伝承後に名前まで意識がいかなくなかったと推測される。

この曲を白根に伝承するにあたり、曲名を表記する必要があった為、平塚市や二宮町で使われている『屋台』を採用した。ちなみに伊勢原市池端では『屋台囃子』という名前で表記されており、江戸囃子においても『屋台』という名称がついているので、屋台という名称で通じる地域は多く存在する。

漢字に関しては当て字を使う傾向があるので、全ての曲名において譜面では平仮名での表記とし、カッコ内に一般的に使われている漢字を表記した。

② みやしょうでん

この曲は上記の『やたい』の次に多く伝承されている曲で、主に神輿が宮立ちと宮入りをする時に囃される曲である。この曲は『やたい』とは異なり地区によって曲調の違いが見られ、この原因としては次の2つが挙げられる。一つ目は宮立ちと宮入りの時のみしか叩かれないために、演奏される機会が少ない。二つ目として曲自体は短い、単調なリズムの組み合わせではないため、継続して演奏する機会がないと曲を正確に覚えることが難しい。以上の2点より、祭り囃子の伝承時に曲調が変わって伝わっていく傾向があったと考えられる。しかしながら、曲自体が短いことから覚え易いと判断されて『みやしょうでん』のみが伝わり、『やたい』がない地区も少なからず存在している。

『みやしょうでん(てん)』の漢字表記は『宮昇殿』が多く、『宮聖殿』や『宮聖天』の表記も見られる。また、『みやしろ』と呼ぶ地区も存在する。

③ きざみ

『きざみ』は『みやしょうでん』と『やたい』を繋ぐもので、曲という程のボリュームではないが、囃子においては重要な役割を果たしており、ほとんどの地区で『きざみ』という名称が使われている。漢字では主に『刻み』という表記が一般的であると思われる。

この曲は『みやしょうでん』を演奏しない限り叩く機会がないため、『みやでょうでん』と同じ理由により、地区によって曲調に大きく違いが見られる。なお、『きざみ』自体が存在せず、『みやしょうでん』と『やたい』を単独で叩く地区も存在する。

④ にんば

この曲はもともと比々多地区で伝わって来た曲ではないが、白根で最初に太鼓を教える時に納涼祭前の練習が1回しかなく、祭り囃子の経験のない子供たちでも直ぐに叩けるように、急遽用意した曲である。『にんば』についての詳細はここで記述しないが、叩き易くノリの良い曲調で、もともと『にんば』のなかった地区が外部から取り入れる例も多い。叩き方や曲の構成は地区によって異なることが多いが、白根の『にんば』は子供たちが覚え易いように短くシンプルにし、かつ大太鼓のリズムで曲の進行を調整できるように、私なりに考えて編曲している。

白根の初期の練習では子供たちが太鼓に早く馴染めるように『にんば』を使って練習していたが、次第に『やたい』と『みやでょうでん』を練習する比率が増え、現在では全く叩く機会がなくなっている。私としては無理をして『にんば』を伝承してもらうつもりはなく、そもそも比々多地区の囃子には存在しなかった曲であり、今後の会の運営で必要な時に利用して頂く程度で十分であると考えている。

7-3. 笛について

比々多地区ではかつて笛が吹かれていたという話を聞いたことはあるが、その伝承経路やどの様な曲調であったかは不明である。近年、比々多地区で最初に笛を吹いたのは私で、その後は徐々にではあるが他地区にも笛が広まりつつある。

私は平成10年(1998年)頃に二宮町の中里(明星神社)の守泉長次氏から笛を教わり、その後は平塚市を中心に私の笛が伝わっている。平塚市では無形文化財である『前鳥囃子』があり、全曲において笛が存在しているが、外部への伝承には慎重であることから、他地区への伝承は限定的であった。当時は私自身が平塚市の豊田や中原へ太鼓を叩きに行く機会があり、その時に笛を教えたことがきっかけで、二宮→伊勢原→平塚への笛の伝承ルートが形成された。平塚ではかなりの速度で笛の伝承が行われており、この要因としては2つが挙げられる。一つ目はもともと平塚市では太鼓が盛んな地区が多く、笛へ興味を持つ者が多かったこと、二つ目は私が笛の譜面を分かりやすく作成し、音源をCDに焼いて清水太鼓店で販売させて頂いたことから、わざわざ笛を習いに行く必要がなく、誰でも譜面と音源を使えば容易に笛の習得ができるようになったことである。

平塚での笛の伝承経路についてはもはや容易に追跡できる状況ではなく、笛の吹き手に話を聞くことで私の譜面と音源を使って覚えたということを知ることが度々ある。一方、伊勢原市で笛の伝承がそれほど起こっていない主な理由は、平塚ほど太鼓が盛んではないことが大きな要因であり、今後も急速に笛が広まる可能性は低いと予想される。

同系統の囃子で吹かれる笛は二宮(大山囃子)と四之宮(前鳥囃子)の2系統に大きく分けられ、『やたい』に関しては曲調が非常に似ており、両者の関係については分からないが、若干の差異には太鼓の曲調の違いによるものと、吹き手の好みによるものも含まれると推測される。事実、私自身も前鳥囃子の太鼓と一緒に笛を吹いた経験があり、笛の違いも聞くだけで理解することができ、囃子の曲調に合わせて両者の吹き方を使い分けることが多々ある。私の譜面で笛を習得した者でも、四之宮の笛の曲調を取り入れる吹き手は少なくない。

7-4.指導方法

かつては太鼓の練習といえば聞いて覚える方法が主体であったが、現在のように練習時間に制約がある場合や、文書などの作成および複製が容易にできる状況では、子供たちが分かりやすい譜面を使いながら短時間で集中して指導することが最適であると判断した。しかしながら、祭礼の本番では譜面を見ないで叩く必要があるので、譜面は極力サポート的な役割という意識をもって、練習中は譜面を伏せて耳で聞いて覚える練習も取り入れながら指導を行った。

最初は私が中心となって子供へ指導をしていたが、将来的には笠窪へ戻ることを決めていたので、早い段階で大人が自立して囃子を習得し、私がいなくても子供たちへ指導ができる体制作りを心掛けた。また、近年では小バチなどを取り入れて、バチ数を増やしたり、テンポを速くする地区が増えてきているが、基本の叩き方が崩れる叩き手も多く見られるため、できるだけ基本を重視した指導を心掛けた。

さらに、慰霊祭での発表や、白根の例大祭と納涼祭でも発表の機会があるため、発表の為の曲の構成や、聴き手の立場を考慮した叩き方などを説明し、演奏の質を高めることも意識しながら指導を行った。

8. 指導結果

指導当初、白根地区で私以外に囃子を経験している者は殆どおらず、子供たちへの指導は大変なものであったが、幸いにも太鼓連に加わって頂いた大人の方々の習得が早く、早い段階で子供たちへの指導を引き継ぐことができた。その後は、大人の方々への指導に集中することができ、現在では他地区の太鼓連とほぼ同等のレベルまで達していると感じている。

しかしながら、笛に関してはまともに演奏できる吹き手を育てることができず、私の指導不足が招いた結果である。ただし、笛はもともと私が二宮町から比々多地区へ持ち込んだものであり、比々多地区には無かったものであることから、笛の習得については指導当初から

強制するつもりはなく、あくまで太鼓を優先して指導を行った結果でもある。また、太鼓と異なり、笛の習得にはかなりの労力が必要で、強制することはかなりのストレスを与えてしまうことにもなりかねない。笛の譜面の見方や大まかな吹き方については説明しているので、今後、太鼓のレベルが上がり、笛に興味を持つ会員が現れれば自発的に笛の習得に取り組んで頂きたい。

9. 今後の課題と問題点

9-1. レベルの違い

祭り囃子は経験が深い浅いに係らず、子供から年配者まで幅広い年齢層の方々が一緒に楽しめるものであってほしいが、当然ながら、個々のレベルの違いによりストレスが発生するものである。周囲とレベルの差（高い・低い）があり、改善策が見つからずに辞めていく例は多く、祭り囃子が衰退する原因の一つにもなっている。もっとレベルアップしたいが、どうしてよいか分からない。他の地区と交流を持って経験を積みたいが、会全体がそういう雰囲気ではない。反対に、ある程度叩ければ十分で、リスクを冒してまでレベルアップする必要はない。レベルの差が開くと、新しい会員が増えなくなる（気軽に会へ参加し難くなる）。など、様々な意見が上がるのが予想されるが、この問題については会全体で十分に議論して、方向性を決めるしか手段はないと考えられる。

9-2. 太鼓の維持・管理

白根太鼓連の太鼓を叩く技術については他の地区と全く遜色が無い程に上がっているが、太鼓の維持や管理については、6年という短期間で簡単に習得できるものではない。大体どの地区でも太鼓に深く携わって来ている者が1、2名おり、太鼓の革の選び方や締め方、あるいはメンテナンス方法など、良い太鼓を準備する体制が整っているものである。

金銭的に余裕のある地区であれば、太鼓の革を毎年購入することができるが、近年の景気の低迷状況ではそのような太鼓連はほんの一部に過ぎない。白根でも6年の間に1枚も革を購入していない現状を考えると、購入時に良い革を見極める目を養えることが出来る会員が将来現れるかどうかは分からない。しなしながら、太鼓を組んだり締めたりする技術に関しては、努力をすれば必ず身に付くので、1年に最低1回は締太鼓をバラして組み直すという習慣をぜひ付けて頂きたい。

比々多地区の祭り囃子は高い音を好む系統の囃子であることから、できるだけ限界まで革を締めたいところではあるが、革が切れるか切れないかの境界線を見極める力を付けることはかなりの経験を要することであり、革の予備がない白根にとっては革の購入以上に注意すべき点である。締太鼓の革は約4万円と非常に高価であり、ほんの少しの判断ミスが革を破ることに繋がるため、縫目付近の革の状況を良く観察しながら、少しずつ経験値を上げて行って頂きたい。

9-3.他地区との交流

現在、白根の太鼓連は立ち上がったばかりで、他地区の太鼓連との付き合いは殆どない状況であるが、他地区との交流は白根太鼓連自体の活性化や比々多地区(あるいはもっと広範囲)における祭り囃子の活性化の為の一つの手段である。しかしながら、付き合いには当然デメリットが発生する可能性も考えられるため、他地区との交流については慎重に検討する必要がある。参考までに、現状の比々多地区の付き合いの状況を以下に記す。

① 三ノ宮・栗原・神戸

この3地区は比々多神社の例大祭に合同で参加しており、神輿渡御の際には3基の人形山車にそれぞれの地区が乗り込んで、祭り囃子を演奏する。また、国府祭にはこの3地区が年番で参加している(主に神輿)。

② 善波・笠窪・坪ノ内

笠窪は太鼓連の立ち上げ当初から善波と付き合いがあり、善波の例大祭の時は笠窪が太鼓を持参し、反対に笠窪の例大祭では善波が太鼓を持参する。近年になり坪ノ内が太鼓連を立ち上げると、善波と笠窪に坪ノ内を加えた3地区でそれぞれの例大祭に太鼓を持参するようになっている。

③ 神戸・串橋

神戸は上記以外に串橋と交流があり、串橋の例大祭では神戸青年会が太鼓を叩きに来る(太鼓は持参しない)。反対に比々多神社の祭礼時には串橋が神戸の応援として神輿を担いだり、太鼓を叩いたりしている。

④ 神戸・坪ノ内

最近になり、神戸と坪ノ内は宵宮だけではあるが、太鼓の付き合いを始める様になってきた。

以上のように、比々多地区では①三ノ宮・栗原・神戸のグループと②善波・笠窪・坪ノ内のグループに大別できる。串橋は神戸と強い結びつきがあることから、①のグループに属していると判断してもよいと考えているが、坪ノ内との交流を始めたことから、①と②のグループを繋いでいる唯一の地区でもある。これらの関係の他にも、それぞれの地区において祭り囃子や他地区との付き合いに関する考え方には違いが見られることから、白根太鼓連が今後どのような方向に進んでいきたいかを十分検討した上で、交流相手を決めて行くところが重要だと考えられる。

次に、比々多内の地区名と対応する太鼓連の団体名を表記するが、三ノ宮では三和会とは別に平成16年(2004年)に『なでしこ囃子会』を結成し、子供たちへの指導に力を入れている。

る。定期的に練習を行い、国府祭や道灌まつり、慰霊祭などに参加している。

平成 26 年(2014 年)現在

	地区名	神社名	太鼓連団体名
1	三ノ宮／木津根橋	比々多神社	三和会／なでしこ囃子会
2	栗原	比々多神社	栗原祭保存会
3	神戸	木下神社	神戸青年会
4	善波	三嶋神社	善波太鼓連
5	笠窪／もえぎ台	神明神社	笠窪太鼓連
6	坪ノ内	八幡神社	坪ノ内友の会太鼓連
7	串橋	雷電神社	串橋太鼓連
8	白根	神明社	白根太鼓連
9	大住台／ベルフラワーズ大住台	—	—

なお、大住台とベルフラワーズ大住台は区画整理事業として善波の一部と坪ノ内の一部から誕生した地区で、大住台の名は昭和 63 年(1988 年)に命名された。大住台では現在まで太鼓連の発足はしていないが、近隣の笠窪や坪ノ内の太鼓連に所属する者もあり、太鼓連の立ち上げについては十分可能性があると考えられる。しかしながら、白根とは異なり地区内に神社(氏神)が存在しないことや、近年に誕生した新興住宅地であることから、住民の了解を得るにはかなりの労力が必要であると予想される。

9-4.さらなる発展

私が白根に伝承した囃子は、笠窪に伝わってきている基本の叩き方であるが、ある程度太鼓の経験を積むと、応用の技術を欲することは当然のことである。白根地区でも会員の要望に応じて『小バチ』や『抜きバチ』、あるいは他地区の異なる叩き方を指導したこともあり、叩き手のモチベーションを高めることに繋がった。さらに、比々多地区に古くから伝わっている曲ではないが、他の地区では『やたい』と『みやしょうでん』以外にも曲が存在し、会員の中からは曲数を増やしたいという声も聞かれたが、外部の曲を取り入れることは避けさせて頂いた。その理由としては次の 3 つが挙げられる。

- ① 祭り囃子の根本は伝統芸能であると考えており、比々多地区に伝わっていない曲を、安易に取り入れることには抵抗を感じた。
- ② 曲数を増やすことで、会員の中で習得の度合いに差が出るのが予想され、会員同士の関係に亀裂を生じさせたくなかった。
- ③ 白根が今後、他地区との交流を広めていく中で、外部の曲を叩くことでどの様な弊害が発生するか予想が付かなかった。

しなしながら、曲数が少ないということは、ある程度のレベルに到達した者にとっては物足りないことであり、祭り囃子への熱意が薄れていく大きな要因の一つでもある。実際に私も地元の曲だけでは物足らず、これまで様々な地区へ出向いて地元にはない曲を習得しており、この行動がなければ現在でも祭り囃子に携わることができたかどうかは確信の持てない部分である。但し、これまで何度か笠窪太鼓連でこれら外部の曲を定着させようと試みたこともあったが、習得するには個人差があり、太鼓連全体を混乱させる恐れを感じた為、現在では笠窪太鼓連の練習の中では基本の曲以外を指導することは行っていない。その代り、笠窪祭囃子保存会を私自身で立ち上げ、地元の伝統芸能の枠を超えた祭り囃子として、さらなるレベルアップを望む者がモチベーションを維持できる手段として活用している。

白根太鼓連が今後どのような方向に進んでいくかは定かではないが、外部の曲を取り入れる場合にはメリット・デメリットを十分考えることが必要であると思われる。現在では録画・録音技術の発達により、祭り囃子の記録および解析はより手軽に行えるようになってきており、外部の曲をコピーすることはそれほど難しいことではないが、断りもなく勝手にコピーをされる側にとっては気分を害することにもなりかねない。祭り囃子自体に特許があるわけではなく、コピーすることは違法ではないが、やはり、倫理的な観点からいけば相手に対して何らかの配慮をする必要があると考えられる。

以上は、私自身がこれまで様々な地区の囃子を学んできた経験から助言できることであり、この問題については非常に神経を使う部分である。なお、例外ではあるが、ある地区では祭り囃子を改めて創作太鼓として活動しており、これについては賛否両論があると思われるが、伝統芸能としての縛りを受けずに、自由に作曲や編曲をすることが可能となる。

私がウェブ上で公開しているサイトでは、各地区の祭り囃子の紹介も行っているので、興味のある方は参考にさせていただきたい。また、今後の白根太鼓連の運営において問題が生じた場合は、いつでも相談をして頂きたい。

サイト名・・・『相模国神社祭礼』

URL・・・<http://eda.myhome.cx/taiko-2008/public/top.html>

※URLは変更する可能性あり

10. 楽器の紹介

10-1. 締太鼓

『締太鼓』は『小太鼓』とも言われるが、多くの地区では『シメ』や『ツケ』などと省略して呼んでいる。『ツケ』についての由来は定かではないが、太鼓の革を“締め付ける”から来ているとする説もある。なお、『やたい』という曲は最初の締太鼓のソロから始まるが、このソロのフレーズを『ぶっこみ』または『ぶつつけ』と呼ぶ。胴の高さは八寸が定寸とされ、直径に関しては太鼓の革の内側に収まる範囲内で若干の違いが見られる。

麻縄を使用する締め方を『ロープ(ロップ)締め』というが、ロープ締めは手の込んだ作業で時間が掛かり、経験を要するために伝承が難しい。一方、現在主流となっているのが『ボルト締め』で、ロープ締めの問題点を解消した方法であり、何といてもスパナ1本で締められるのが大きなメリットであるが、金属製のボルトとリングを使用するために重量が増え、また叩いたときに若干の金属音が含まれる。締太鼓に使われる革は一丁掛けから五丁掛けまであり、数字が増える毎に革の厚みが増して金額も上がる。ちなみに比々多地区では三丁と四丁がちょうど半々の割合で使われており、白根太鼓連の革は三丁掛けである。

締太鼓を組み付ける際には、主に以下の5点に注意して頂きたい。なお、④に関してはかなりの経験を要し、さらに⑤に関して実施している地区は極めて稀である。締太鼓の革は縫目付近が一番強度が低下しているため、太鼓を取扱う際には縫目付近に物を接触させないことを常に意識することが重要である。また、叩き終わったら必ずボルトを緩め、長期間叩かない場合は分解して保管するなど、メンテナンスには十分気を使う必要がある。

- ① 革と胴が接する箇所には必ず潤滑剤を塗布し(一般的には蠟を塗り)、締めたときに革と胴との抵抗を少なくすることで革が締め易くなり、高音が出し易くなる可能性がある。
- ② 革に対して胴が中央に来るようにセットすることが重要であり、胴が革に対して偏芯するとボルトを締めたときに革へ掛かる負荷が偏り、革が切れ易くなる原因になる可能性がある。
- ③ ボルトとナットの接触部分には必ず潤滑剤(機械油など)を差し、一定の力で均等に締められる状態にしておく。なお、ボルトを締める際にスパナの柄をボルトに押し当てる作業をよく目にするが、ボルトの山を潰す原因になるため、スパナをボルトに接触する直前で止めるか、ボルトの柄に養生をすることをお勧めする。
- ④ 締太鼓の革が切れる箇所は縫目の周辺であることが殆どであるため、ボルトを締める際には常に縫目付近の革の状態変化を観察し、革が切れるかどうかの最終判断は音で聞き分けることが必要である。
- ⑤ 太鼓を縫っている麻紐が切れたり、縫目の穴が開いてきた場合は、補修をすることで革の寿命が大きく伸びる。

革は叩いた箇所が伸びやすいため、頻繁に太鼓を回しながらセットして、均等に革が伸びる様にしておくと、ボルトで締めた時に革に掛かる負荷が均等になりやすい。また、大太鼓と違って、締太鼓の革ではバチで叩いた場所が切れることは稀であるが、革の局所的な消耗は短寿命に繋がる恐れも考えられるため、革の状態を見ながら叩く場所を変えることが重要である。なお、革自体が天然のもの(牛の革)であることから、同じ革でも厚さには違いがあり、当然ながら厚い部分の強度が高く、薄い分が切れ易くなる傾向にある。但し、革の強度は脂肪の有無や革の部位などにも影響することから、革の購入時にある程度の見極めが出来ることが望ましいが、これについてはかなりの経験を要する。

10-2.大太鼓

『大太鼓』は胴が長いことから『長胴太鼓』とも呼ばれ、比々多地区近辺では『オオド』と呼ぶところが多い。寸法や形状は様々であるが、面径は一尺一寸または一尺二寸の間であるところが多く、省略して尺一（しゃくいち）、尺二（しゃくに）と呼ぶことが多い。革は鋸で直接胴に固定するため、革が傷んだ時には新規の革に張り替えを行う。革を張る際に必要な耳を切り取らずに残しておき、革が緩んできた場合に同じ革で張り直す例もあるが、極めて稀であるため、ほとんどの場合はこの耳は切り取ってしまう。なお、締太鼓と同様に太鼓の胴に使われる材質は一般的には櫟(けやき)であり、革を張るときに掛かる力やバチの衝撃に耐えられる硬い性質の木(広葉樹系)が選ばれる。

大太鼓は締太鼓と異なり組み付けの作業はないが、気を付けておきたい点を紹介する。特に大太鼓は革を簡単に張り替えられないことが締太鼓との大きな違いであり、革の保護に関しては締太鼓と同等以上に注意する必要がある。なお、大太鼓でも締太鼓と同様にボルトで締められるものや、ロープで絞めるタイプのものも存在するが、私自身、実物で一回も目にしたことはない。

- ① 革が胴に直接固定されているために革を緩めることが出来ず、温度や湿度の急激な変化により、革が自然に切れてしまうことが稀にある。保管場所については高温多湿になる場所は極力避け、木箱などの調湿性のある容器に入れておくことが望ましい。
- ② 締太鼓と異なり、大太鼓の革が切れる箇所は胴の縁の内径付近になるので、同じ個所を叩き続けるとそこだけ革が消耗して切れ易くなる。多くの地区では大太鼓の胴に付いている金具(リング)を利用して、祭礼時には屋台の柱などにロープで大太鼓を固定するため、どうしても同じ場所を叩くことになってしまう。そのため、練習時には太鼓を嵌めるだけの枠タイプの台などを使用し、革の消耗の少ない場所を叩く様に心掛けることが、革の寿命を延ばすことに繋がる。
- ③ 大太鼓の革は新規を除いて基本的には片面ずつ張り替えて行くため、練習で古い方の革を叩き、新しい方を本番のみで叩くようにすることで、新しい方の革の伸び(緩み)を抑えることができる。
- ④ 大太鼓の張り替えは基本的に人が太鼓の革の上に乗る、踏んで伸びた革をロープで引っ張りながら張っていく。実際にこの革を踏む作業は大変な労力が必要で、革の張力が強くなればなるほど脚への衝撃が増えるため、大太鼓の革の張り替え時には出来るだけ人員を確保することが必要である。また、予算の限られている地区ほど大太鼓の革を張り替える機会が少なくなり、革が切れるまで何十年も張り替えをしない地区もあることから、大太鼓の張り替えのチャンスがあれば出来る限り参加することをお勧めする。太鼓店でもお任せである程度まで張ることは可能であるが、人員が少ない場合でも最後の仕上げだけは直接踏み、音色の違いを確認するなど、少しでも経験値を積むことが望ましい。

10-3. 笛

祭り囃子で使われる笛は『篠笛』または『竹笛』とも呼ばれ、材料には節間が長い篠竹(女竹)が用いられる。笛の調子については、三味線や唄に合わせるために1オクターブを十二律に分け、低い音程の一本調子から高い音程の十二本調子まであり、各調子の間には半音の音程差がある。稀に十三本調子も存在するが、その場合は一本調子のちょうど1オクターブ上の音程になる。

篠笛は穴のピッチがほぼ均等に開けられた日本独特の音階を持つ笛であるが、洋楽器との合奏に合わせるために音階をドレミ調に調律した笛もある。笛の頭部先端には調子を表す数字が漢字で表記されているが、クラシックのように音程や音階が規格化されている訳ではないので、同じ調子の表記であってもメーカーによって音程が異なることが多い。新しい笛を別のメーカーで購入する場合は、オーダーメイドで希望の音程に調律してくれるところもあるので、購入前に相談するのが望ましい。いずれにしても、既存の笛を購入する場合にはかならず試し吹きをして、自分にあった笛を手に入れることが大切である。また、オーダーメイドの場合でも、可能であれば複数本製作してもらい、試し吹きをして自分に合った方を購入する方法をお勧めする。

篠笛には息を吹き込む歌口(唄口)が1穴あり、指を塞ぐ指孔(しこう)の数は6穴と7穴の2種類あるが、地域によっては4穴や2穴などの笛も存在する。相模地方で伝わっている祭り囃子の笛は殆どが7穴であり、私が習ってきた二宮の中里では(有)大岡紫山が製作している四本調子の笛を使っていたので、白根にも同社製の四本調子の笛を薦めている。

竹の外周には割れを防止する籐(とう)や樺(かば)で巻きを施し、管内には唾液の残留による腐食の防止や、音の鳴りを向上させる目的で漆を塗るものが多く、高価ではあるが管外にも漆を施す笛もある。籐と漆の組み合わせは作り手によって異なり、現在では籐の代わりにナイロン製の糸、本漆の代わりに合成漆(カシュー)を用いることも多い。さらに、入門用の安価な笛の材質には合成樹脂や木材が使用され、アルミなどの金属製品も販売されている。

10-4. 鉦

祭り囃子で使われる鉦は『当り鉦』や『摺り鉦』、または『チャンチキ』や『ヨスケ』などと呼ばれ、真鍮(銅と亜鉛の合金)製の皿状の楽器である。凸面を手で掴み、バチ(撞木)を使って凹面を叩いたり摺ったりして音を出す。バチは主に竹の柄の先端に、鹿の角を差したT字型のものである。

10-5. バチ

バチ(撥)は楽器としての分類ではないが、祭り囃子では重要な役割を果たす道具であるため、あえて項目を設けて説明をさせて頂く。バチは木を削って作るものであるが、どの種類の木を使うかは地区によって異なり、一般に市販されているものを購入する場合と、太鼓連自体で自作する場合に分かれる。こだわりのある地区では木の選別から始まり、山へ行って

木を切り倒してから角状に製材し、ある程度乾燥させてからバチ状に加工する。

杉(すぎ)や檜(ひのき)などの針葉樹系の木材は軽くて加工性が良く、奏者の腕や手、太鼓の革および胴に与える衝撃を軽減できるメリットがあるが、強度が弱く折れ易いため本数を沢山必要とすることがデメリットとなる。反対に柾(もみじ)や樫(かし)などの広葉樹系の木材は硬くて加工しにくい、強度が強く折れ難いことがメリットとなり、奏者への負担と、太鼓に与える衝撃が大きくなるのがデメリットとなる。

近年、市販されているバチの価格は上昇傾向にあり、購入する場合には会の運営費を圧迫する要因にもなっているため、環境が整っていればバチを自作するメリットは大きい。また、バチが劣化すると叩いた衝撃で折れ易くなるため、古いバチや大きな亀裂の入ったバチなどは極力使用を避け、演奏時の怪我には十分気を付ける必要がある。

1 1. 所感

私はこれまで既存の団体で太鼓や笛を指導した経験はあったが、祭り囃子の文化が殆どない地区で、太鼓連の立ち上げに一から携わることは初めての経験であった。新しい太鼓連の誕生に係ることができたのは、祭り囃子に携わる者として大変幸せなことであり、今後も白根太鼓連の増々の発展を祈願したい。また、白根地区への指導を通じて私自身の指導力や演奏技術にも向上が見られ、今後もこのような機会があれば是非挑戦してみたい。

私がこの『白根地区への祭り囃子の伝承について』を書き上げた目的は、冒頭で述べた様に白根への伝承についての記録を残すことであるが、真の目的は、白根太鼓連が今後直面する様々な問題に対して、この文書により少しでも解決の糸口に繋げることである。白根地区へ祭り囃子を伝承した私にとって、白根太鼓連の皆様には祭り囃子のレベルを今後も継続して上げて行って欲しいという願いは強く、かなり力を入れて文書を書かせて頂いた。その結果、内容的にはかなり専門的になってしまい、誰でも気軽に読めるものでは無くなってしまったが、問題に直面した際には是非目を通して頂きたい。

最後に、このような貴重な経験をさせて頂いた白根地区の皆様には感謝すると同時に、もし、将来笠窪の祭り囃子が衰退し、自力での再興が難しい状況に陥るようなことがあれば、今度は白根太鼓連の手により笠窪の祭り囃子を復活させて頂きたいと願う。くれぐれも**基本に忠実**にご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

平成 26 年(2014 年)10 月 19 日

添田悟郎